

---

# リリカルなのはHEROS外伝

ゼロディアス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのはHEROS外伝

### 【Nコード】

N3545X

### 【作者名】

ゼロディアス

### 【あらすじ】

これは「魔法少女リリカルなのはHEROS」の光がない間の空白期の話。

「魔法少女リリカルなのはHEROS」を見ないと分からない内容がありますのでご注意ください。

## 最初に（前書き）

やっぱり新連載で行く事にします。

## 最初に

ラン

「はい、始めましたあ、『リリカルなのはHEROS』の番外編ストーリー!」

なのは

「今回は解説などを行い、やって行こうと思いまーす!」

フェイト

「……」 どんよりオーラ。

カズキ

「フェイト、光がなくて寂しい気持ちは分かるが明るく行こうよ?」

はやて

「すずかちゃんとアリサちゃんだつて大翔さんとキヨウスケさんいないの我慢して……」

キヨウスケ・大翔

「「んっ?」」

はやて

「なんでおるん!?!」

アリサ

「光以外のメインキャラは全員レギュラー、準レギュラーだからね」

フェイト

「なんで光だけ！？（泣）」

ダイキ

「しょうがないじゃないか。光が9つの世界行ってる間の話僕等に出番無いんだから」

なのは

「ラン、解説お願い」

ラン

「お、おう。まあこの作品は分かりやすく言えば『リリカルなのはHEROS』の番外編を中心にした話で、1話1話主役が違う」

キョウスケ

「ただし、破壊者に出番は無い」

大翔

「フェイトにとっては残念ながら」

フェイト

「orz」

ラン

「第1弾の番外編はこれだあ！！」 列伝の次回はこれだあ！的な。

黒いゼロが出現？

どっちが強いかという挑戦を受けるウルトラマンゼロことラン！

だが彼には勝つ自信が無かった……。

第1弾『死闘！ ゼロVSダークゼロ！』

## 第1弾 『死闘！ ゼロVSダークゼロ』（前書き）

「魔法少女まどか マギカ NEXUS」も更新しましたので、  
こちらにもよろしくお願いします。

OP「すすめ！ ウルトラマンゼロ」  
挿入歌「DREAM FIGHTER」  
ED「キラメク未来」

暗黒巨人ダークゼロ  
破壊獣モンスアーガー  
登場。

## 第1弾 『死闘！ ゼロVSダークゼロ』

ランとなのは、フェイト、はやてはいつものように学校に行き、龍夜、セイナ、ライハ、ネーナ、カズキも入学する事になった。

アホの子は一応ちゃんと入学出来た。

はやてやカズキ、セイナ達はクラスが違い、龍夜は年が違うので上のクラスに入る事になり、授業を受けていた。

「ねーねー、なんで龍夜と同じクラスじゃないの？」

「あのですね、龍夜さんどう見ても私達と年が違うじゃないですか。少しでも年が離れてればこうなりますよ」

セイナのその答えにライハ「ぷう〜」と頬を膨らませていた。

因みにマテリアルズの事はなのは達の親戚だったり双子の妹だったという事になっている。

そしてクラスはセイナ達がなのは達のいるクラス、カズキがはやてと同じクラス、龍夜は上の学年という事である。

その頃、なのは達の教室では……。

「……」

フェイトに元気が無かった。

「ねえ、やっぱり光がいなくなったからフェイト元気無いの？」



アリサが小声でランに尋ねると、ランは「ああ」と答えた。

光は現在9つの世界ウルトラマンと仮面ライダーの世界を旅してる途中である、光とフェイトは恋仲な為、フェイトは寂しがっていたのだ。

（光、早く帰ってきてよ……）

光は学校では別の学校に転校した事になっているが、この世界に戻ってくればまたこの学校へ入学する。

\*

放課後、ランとなのはは手を繋ぎながら帰宅をしている途中で、今2人は人気のない橋を渡って歩いていた。

「やっぱりフェイトちゃん、寂しいんだろうね。もし、ランが遠い所行ったら……」

なのははチラッとランを見る。

「大丈夫だよ、光だって言ってる？ あいつは絶対帰ってくるって」

「……うん」

赤い身体に頭部に皿がある「破壊獣モンスアーガー」が突如空中からワームホールが出現し、降り立った。

「ギャオオオオ!!!」

「怪獣だよラン!」

「ああ!」

ランはウルトラゼロアイを取り出すが、その時、視線を感じ振り返ると少し離れた位置に自分達と少し年上くらいの少年がこちらを見ていた。

「なに? あの人?」

少年はウルトラゼロアイそっくりの黒いウルトラゼロアイ「ダークゼロアイ」を取り出し、目に装着した。

「デュワッ!!」

少年の姿は黒い光に包まれ、モンスアーガーの元まで飛んで行き、モンスアーガーの目の前にウルトラマンゼロそっくりの巨人が現れた。

プロテクターと目は紅く、身体の銀色の部分以外は黒く染まったゼロ、「暗黒巨人ダークゼロ」へと少年は変身したのだ。

「あれって……!」

「ウルトラマン、ゼロ!?」

人々はダークゼロをウルトラマンゼロと勘違いし、喜ぶ者がいるが

すぐにいつもと違うと気付いた。

「シエア！！」

ダークゼロはモンスアーガーの顔を蹴りつける。

「グウ！？」

負けじとモンスアーガーが連続でダークゼロに殴りかかるがダークゼロは余裕で全てを避け、モンスアーガーの背後に回り込んで首を絞めつけ、地へと叩きつける。

「デュツ！！」

「ガオオ！！？」

叩きつけたモンスアーガーの頭を掴み、持ち上げてモンスアーガーの横腹を蹴り、腹部に膝蹴りを炸裂させた。

「又オオ！？」

「ハアア、シエア！！」

右足に炎をまわして繰り出す飛び蹴り、「ダークゼロキック」がモンスアーガーの弱点の頭の皿に炸裂し、皿が割れ、モンスアーガーは力なく倒れこんで消滅した。

ダークゼロは人々に向けてサムズアップをしたことで、人々は彼もウルトラマンだと思い安心感を抱いた。

そして人々から歓声が上がリ、ダークゼロは両手を広げて歓声を受け止める。

「ハッハッハッハ」

\*

翠屋へと戻ったランとなのはは……。

「くっそ!! なんなんだあいつは! 人の姿真似しやがって!」

「真似って姿だけだよ……?」

「ちよっくら俺出かけてくる!! あのニセモノ野郎見つくるってやる!」

ランは翠屋を飛びだし、先程の少年を探しに行った。

「ちよっとラン!？」

ランは川沿い辺りまで走りながら少年を探していた。

「誰かお探しかい?」

ランが振り返るとそこにはあの少年がいた。

「このニセモノ野郎……」

「ニセモノ? バカ言うな。俺もウルトラマンゼロだ」

「ふざけんな! あんなどう見てもニセモノだろ?」

少年は「ふう〜」とため息をつくと……。

「残念だが、ニセモノじゃない。最も『元』ウルトラマンだが」  
「なに？」

「俺は別世界に渡る術がある。つまり、俺は別世界から現れた」

少年の話だと、ランがいた世界とは違う世界のウルトラマンゼロで、ランと同じくウルトラマンレオの元で禁句を犯したため修行していた。

だが彼は修行が嫌で修行から逃げ、ある星で「闇」を自分のものにした。

それがあの姿、ダークゼロである。

「んで、俺は力をもつと求め、ダークゼロになった際に別世界に行ける能力を見に付け色んな世界を周りながら強い奴を倒し強くなり続けた」

「で、次のターゲットがこの世界って訳か」

少年は「そうだ」と答え、ランを指差す。

「ホントは破壊者とかいう奴と戦いたかったが不在みたいだからその師匠と言われてるゼロ、お前に決闘を申し込む！！」

そついうと同時に少年はランに向かって一瞬で近づき、ランの胸倉を掴んで放り投げる。

「ッ！？」

地面に叩きつけられるラン。

「ぐあつ!? いってゝ!?」

「もし断ったら、怪獣を送り続けて挑発を繰り返す。決闘は今日の夕方5時だ」

少年はそれだけ言つと去つていこうとする。

「そうだ、俺の名前を教えてやる。『もろぼし諸星レイヤ』だ」

名乗った後、レイヤは歩き去った。

（あいつ、俺より強い。今の俺じゃ……）

ランはその場に座り込む。

「ラン！」

とそこへなのはが駆けつけた。

「なのは……」

「どうしたの? 元気無さそうな顔だけど……?」

なのはがランの隣に座りこむ。

ランは先程の事をなのはに話してみた。

「そんな事で落ち込んだの?」

「そんな事って……、もし、俺が負けたらって思つたや……」

なのはが突然ランの両肩を掴み、顔を近づける。

「はっ！？　ちょ、なのは！？／／／／」

「えい！」

顔を真っ赤にしてるランだが突如なのはがランに「俺は石だ、石頭だあー！」とか言ってる人波の威力の頭突きを炸裂させた。

「アダア！？」

「ランらしくないよそんなの！　ランはいつも自信満々で、そんなちゃんと戦う前から諦めてどうするの！？　ランはランらしく、何時も通りに戦えばいいんだよ、ランらしくー！」

なのはのその励ましに、ランは笑みを溢し、なのはを抱きしめる。

「ふえっ／／／／」

「ありがとな、なのは」

「う、うん／／／／」

もうすぐ約束の時間、ランは走り出す。

そして時刻が丁度5時になると、ランとレイヤは人気のないある場所ですぐ顔を合わせ、ランはウルトラゼロアイ、レイヤはダークゼロアイを取り出して目に装着した。

「デユワッ！ー！」

ランはウルトラマンゼロ、レイヤはダークゼロに変身した。

「さあ、おっはじめようぜー！ー！」

ゼロとダークゼロの死闘が始まる。

「デアッ！」

「デュア！！」

ゼロとダークゼロの蹴りが同時に炸裂するが、威力はダークゼロの方が上であり、足にダメージを負うゼロ。

「デュッ！？」

「デアッ！！」

ダークゼロがゼロの肩を掴み、膝蹴りをゼロの胸に叩きこんでゼロの顎にアッパーを決める。

「デアッ！！」

「グアッ！！？」

ダークゼロの攻撃に倒れこむゼロ。

「どうした？ この程度か！！」

ゼロを無理やり立たせ、ダークゼロは何度もゼロの顔を殴りつける。

「ぐっ！？ がはっ！？」

民間人などはなぜゼロとダークゼロが戦ってるのか不明であり、困惑していた。

倒れこんだゼロを両手を広げ、「ハハハハ」と笑いながらゼロを蹴



りあげるダークゼロ。

「ングッ!?!」

ゼロの頭を掴み、ゼロの腹部を殴りつける。

「野郎!! シェア!!」

ゼロはジャンプしてダークゼロに飛び蹴りを繰り出したがダークゼロはゼロの足を掴んで投げ飛ばす。

「ぬわあ!!?!」

次にゼロはダークゼロに殴りかかるもダークゼロは避けてゼロの背中を蹴りつけ、ゼロとダークゼロは互いに同時に両腕をL字に組んでゼロは必殺光線「ワイドゼロショット」、ダークゼロも必殺光線「ダークゼロショット」を同時に発射。

威力を高めるゼロだが、ダークゼロの方が威力は上でゼロは吹き飛ばされる。

「デユワッ!!?!」

押されっぱなしのゼロ、なのはは橋の上で戦いの様子を見ている人々に呼びかけた。

「皆さん、あっちのゼロを応援しましょうよ!! ああ黒いゼロの戦い方は、自分の強さをただ自慢してるだけの戦いです!!」

なのはのその呼びかけに、確かにそうだと思い始める人々。

「ウルトラマンゼロは、そんな自慢するような戦いは絶対にしない  
！！　ゼロ、頑張つて！！」

なのはの声援を受けるゼロ、さらに次々と人々の声援がゼロに送られる。

「頑張れウルトラマン！！」  
「ゼロー！！」

それが目障りなのか、ダークゼロは人々を睨むように見る。

ダークゼロはゼロを抑えつけて何度もその顔を殴るが、途中ゼロに拳を受け止められる。

「へっ、やるじゃねえか……」  
「なに！？」

「だがな、自分の強さを自慢するような野郎が俺に挑もつなんて……  
…2万年早いぜえ！！」

ダークゼロを突き離し、廻し蹴りを叩きこむゼロ。

「ぐっ！？　デユア！！」

ダークゼロは頭にある2本のブーメラン「ダークゼロスラッガー」をゼロに投げ、対するゼロは頭の上にある2本のブーメラン「ゼロスラッガー」をダークゼロスラッガーを弾く為に投げ、互いのスラッガーが激しくぶつかり合い頭の上に戻ってくる。

「デヤア！！」

ゼロに殴りかかるダークゼロだがゼロは避け、ダークゼロの背中に足を振り上げてそのままダークゼロの背中に思いっきり足を振り下げて蹴りつけ、倒れこんだダークゼロを両腕で逆さに持ち、高く飛び上がってパイルドライバーの様な動作でダークゼロを頭から地面に叩きつける「ゼロドライバー」を炸裂させる。

「でりゃあああ!!」

「ぐわあああ!!!?」

「うわっ、いたそ」

なのはは頭を押さえてそんな事を呟く。

「ぐっ……こんの野郎、よくもやりやがったなあ!」

頭からダークゼロスラッガーを手にとり、ゼロに突っ込んで行く。

対するゼロは頭のゼロスラッガーを手にとり、融合させ三日月型の剣「ゼロツインソード」へと変える。

「フン、シエア!!」

ゼロはこちらへ接近するダークゼロに向かってゼロツインソードを構えてこちらにも突撃、そして腕を伸ばし、高速でドリルのように回転しながらゼロツインソードで敵を斬りつける「プラズマスパークスピン」を繰り出す。

「ブラックホールが、吹き荒れるぜえ!!」

ダークゼロとぶつかり合うと、ダークゼロは吹き飛び、遠くへ飛ん

で行きながら消え去った。

「ぐわああああ!!!!?」

「シエア」

人々にサムズアップを向け、なのはの方をゼロが見ると2人は頷き合い、ゼロは空へと飛び去った。

「デアッ」

その後、ゼロはランの姿に戻り、なのはの元へ。

そして先程の場所で待っているなのはにいきなりなのはを抱きしめるランだった。

「ふにゃ!?!?!?!」

「有難う、お前が励ましてくれたおかげだよ」

「お、お礼なら抱きしめる以外がいいな?!?!?!」  
「えっ?」

なのははランから少し離れて自分の唇に指を押しあてる。

「ダメ、かな?!?!?!」

上目遣いでランを見るなのはに、ランは胸がキュンツときめくが……。

(どういう意味だ?)

意味を全く理解していなかった。

「意味、分かってないでしょ？」

頬を膨らませながら聞くなのはにランはギクツとなってしまう。

なのははランの肩に手を置いて背伸びし、ランの口に自分の唇を軽く当てると、すぐに離れる。

「……ッ／／／／」

「……」

啞然とするランと顔を真っ赤にするなのは。

「ファーストキスだからね？／／／／」

その言葉の意味はランは理解し、一気に顔を真っ赤になった。

なのはは恥ずかしさのあまり翠屋まで走り出し、ランはその場に残され、顔を真っ赤にしたままだった。

\*

その頃、レイヤは……。

「イテテ……」

ボロボロの状態でレイヤはある家の前、というか龍夜とマテリアルズが住んでる家の前で倒れこんでいた。

「大丈夫ですか!？」

そこへ自分を心配するようにセイナが声を慌ててかけた。

(……可愛い／＼)

セイナの顔を見るとレイヤは顔を赤くし、起き上がる。

「ああ、平気平気……イツ!？」

怪我をしている肩を抑えるレイヤ。

「怪我してるんですね、すぐに手当てしますから待っててください」

セイナにそう言われ、無理やり家の中へと連れて行かれるレイヤだった。

\*

次回予告

ウルトラマンゼロ

「さて、中々の強敵だったダークゼロだが、ただ強さを求めるのは本当の強さとは言わない。また戦う事になっても俺は絶対負けねえ！ さあて、次回はコレだあ！！」

月蝕の剣士ジャークムーンが鳴滝によって呼び出され、ジャークムーンは人々を攫う。

その中にはネーナもあり、異変に気付いたカズキとはやてが助けに行き、さらには……。

ゼロ

「次回！ 『アイツがライバルだ！』」

## 第1弾 『死闘！ ゼロVSダークゼロ』（後書き）

このレイヤはゼロSTSの零夜に比べると熱血バカ&子供っぽい個所ありという相違点があります。

予告は列伝風に。

レイヤが連れてきたモンスアーガーは知り合いに頼んで洗脳兵器を……。  
レイヤが作れる訳無いです、バカの子なんですからw



第2弾 『ジャークムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』 (前書き)

OP・挿入歌「GO！ リユウケンドー」  
ED「ずっとずっとずっと」

タイトル変更しました。

**第2弾 『ジャークムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』**

その日、月は明るく輝きを放っていた。

八神家では鳴神兄弟やはやてに守護騎士達が夜空を見上げている。

「綺麗な月やな」

「ええ、主」

上から順にはやてとシグナムが喋る。

「月……か」

カズキは月を見上げながらあることを考えていた。

「カズキ、もしかして彼のことを考えていたのかい？」

ダイキの言葉にカズキは首をゆっくりと頷かせる。

「彼って誰だよ？」

ヴィータの問いにカズキは答える。

「僕と剣を交えた剣士……『ジャークムーン』だよ」

「ジャークムーン」とはカズキやダイキがいた世界にいた怪人であり、「ジャマンガ」と呼ばれる怪物達の一味なのだが、それ以前にジャークムーンは真の剣士であった。

彼は剣士としてカズキ……ゴッドリユウケンドーと何度も剣と剣で戦い合い、敵味方の関係を超えた「絆」が出来始めていた。

だが、そこにダークザギが介入し、自分達の世界を滅ぼしたのだ。

皮肉にもジャマンガ達が復活させようとしていた邪悪な「大魔王グレンゴースト」はジャマンガの幹部もろとも滅び去った。

「でも僕はジャークムーンはどこかで生きてる気がするんだ。あ  
の世界にいた仲間達も」

月を見上げるカズキはどこか寂しそうに、懐かしそうな顔をしていた。

「少なくとも私等はいなくならんよ?」

カズキの手を優しく握るはやて。

「はやて／＼／」

「お熱いね、2人さん」

ダイキはカズキとはやてを茶化す様に言ったのだった。

\*

その頃、ある場所で鳴滝は黒い月の剣士「ジャークムーン」と話しかけていた。

「分かっているな、破壊者の仲間達を叩き潰すんだ」

「リュウケンドーもいるのだろ？ 腕になる……」

ジャークムーンは鳴滝に背を向け歩き始める。

さらに別のある工場の近くの場所で、男性が1人夜道を歩いていると突然ジャークムーンが現れる。

「ひいひい!!?」

当然ジャークムーンを見て驚く男性。

「貴様、リュウケンドーの居場所を知っているか？」

「りゅ、リュウケンドー!? なんだよそれ!?」

「知らぬか、ならば貴様に用は無いな」

ジャークムーンは水晶のようなものを出すとその中に男性は吸い込まれてしまった。

「うわあああ!!!?!」

とそこへ……。

「貴様、なにをしている？」

偶然にもネーナが通りかかっていた。

なぜこんな夜道を歩いていたのかというとライハと喧嘩した為。

「お前は……確か破壊者の一味だったな。お前に聞きたいことがある。リュウケンドーはどこだ？」

「教えてどうする？」

「決まっている、倒す……だけだ」

「知らなかったら？」

ネーナは既に魔導師姿に変わっており、エルシニアクロイツというデバイスも構えている。

「どの道貴様も倒される様に言われているのでな」

ジャークムーンは「暗黒月蝕剣」という黒い剣を取りだしてネーナに襲い掛かる。

「三日月の太刀!!」

三日月型の斬撃をネーナに放ったがネーナは飛行して避け、空中から魔力弾「エルシニアダガー」を連続でジャークムーンに発射するがジャークムーンは剣で全てを弾き落とす。

剣をネーナに向けるジャークムーン。

「大人しくリュウケンドーのいる場所まで案内しろ」

「仲間を売る気などないな。貴様如き、我1人でも倒せる!!」

素早くネーナはジャークムーンに接近し、ジャークムーンは構えるが一瞬でネーナはジャークムーンの背後に回り込みエルシニアクロイツをジャークムーンに振りかざしジャークムーンにダメージを与

える。

「うぐっ!?!」

「エルシニアダガー!?!」

再びエルシニアダガーをジャークムーンに放ち、ジャークムーンはさらにダメージを受ける。

「まだまだあ!?!」

ネーナはジャークムーンに接近し、エルシニアクロイツを振り上げるが、その前にネーナの方に振り返ったジャークムーンにエルシニアクロイツを掴まれる。

「なっ!?!」

「生憎だが、私は貴様に倒される覚えは無い。私を倒せるのは、リュウケンドーだけだ」

「うわあああ!?!?!」

ジャークムーンの取りだした水晶に吸収されてしまったネーナ。

「ふん」

ジャークムーンはそのままどこかへ歩き去ってしまった。

だが途中、ジャークムーンは足を止めてあることを考える。

（いや、待てよ。わざわざ探さ無くとも魔弾龍が私の気配を感知してリュウケンドーを私の元まで案内するのではないか?）

ジャークムーンはある建物の屋上に飛び上がり、しばらく待つてみることに。

するとジャークムーンの予想通りゲキリュウケンがジャークムーンの気配を感じてカズキをここまで案内してきた。

『まだ近くにいますぞ、カズキ』

「ああ、あいつの気迫を感じる」

カズキはジャークムーンが飛び乗った建物を見上げるとその屋上に自分を見降ろすジャークムーンの姿が。

「久しいな、鳴神!!」

「ジャークムーン、お前生きてたんだな」

「貴様と決着をつけるまでは死んでも死にきれん」

このジャークムーンの言葉で自分の世界にいたジャークムーン本人だとカズキは確信。

「ああ、相手になってやる!! ゴッドゲキリュウケン!!」

ゴッドゲキリュウケンをブレスレットから剣を盾に収めた様な「変身待機状態モード」にさせ、ゴッドゲキリュウケンキーという鍵をゴッドゲキリュウケンに差し込む。

「ゴッドゲキリュウケンキー、発動!!」

『チェンジ・ゴッドゲキリュウケンドー』

「撃龍変身!!」

盾から龍の顔がある剣の形をしたゴッドゲキリュウケンを引き抜く

と青い龍が剣先から飛び出し、龍はカズキの身体に降り注ぎ、青と白と金の色を持つ龍の剣士、「魔弾剣士ゴッドリュウケンドー」に変身を完了させる。

「ゴッドリュウケンドー、ライジン!!」

「行くぞ、リュウケンドー!!」

「おう!!」

ジャークムーンは建物から飛び降り、ゴッドリュウケンドーと戦い合い、誰もいない工場の中へと入り激闘となる。

「はあ!!」

ジャークムーンはゴッドリュウケンドーに斬りかかるが、ゴッドリュウケンドーはゲキリュウケンで受け止め、盾を装備した左腕でジャークムーンの腹部を殴りつける。

「ぬお!? 三日月の太刀!!」

「魔弾斬り!!」

三日月の太刀を放つジャークムーンと、威力が弱くなったゲキリュウケンの刃を光らせて敵を切裂く必殺技「魔弾斬り」を互いに炸裂させ、どちらも相殺される。

その際煙が発生し、ゴッドリュウケンドーは煙を払いのけるとそこにはジャークムーンはいなかった。

「どこ行った!?」

「こっちだ!!」



ゴッドリュウケンドーの背中を剣で斬りつけるジャークムーン。

「ぐわあ！？ この野郎！！」

ゲキリュウケンをジャークムーンに振るうがジャークムーンは霧のように消え、また背後から斬りかかるがゴッドリュウケンドーはゲキリュウケンで防ぐ。

「なに！？」

「同じ手が通用するかよ！」

ジャークムーンを押し返してゲキリュウケンでジャークムーンを斬りつけるゴッドリュウケンドー。

「ぬわあ！？」

「まだまだこれからだ！」

とそこへ、恐らくカズキを追って来たのだろうはやたとシグナムが駆けつけた。

「カズキ！？」

「主、今カズキの加勢に……」

シグナムがゴッドリュウケンドーに加勢しようとしたがゴッドリュウケンドーは「来るな！！」と叫ぶ。

「ッ！？」

「なんでや！？」

「こいつがさっき言ってたジャークムーンなんだ！ こいつとの勝負は……俺だけでいい！！ そうだろ、ジャークムーン！！」

「その通り、正々堂々と戦い勝利する！ 我等の戦いに手を出す者は許さん！」

だがここでジャークムーンは自分のやった行為を不思議に思い始めていた。

（なぜ私は水晶に人を閉じ込めたのだ？ そもそも私はリュウケンドーと戦えばそれだけいい、他の奴など……）

その様子を影から見ていた鳴滝は、ジャークムーンの異変に気付き舌打ちをする。

「ヤプール」

鳴滝が「ヤプール」と口にすると彼のすぐ近くに時空に亀裂が入りそこから黒ずくめの男性が姿を見せる。

男性はかつて「ウルトラマンエース」「ウルトラマンタロウ」「ウルトラマンメビウス」に何度も倒されては甦る怨念体「異次元人ヤプール」である。

「奴にマイナスエネルギーを送り、剣士としての誇りを捨てさせる」「分かっている、剣士の誇りなどという下らんものを持ちおって。ただの魔物が」

ヤプールはジャークムーンに向けて紫色の光弾を放つと、その光弾はジャークムーンの背中に直撃。

「ぐわああ……!?!?」

「ジャークムーン!?!?」

一瞬ジャークムーンは倒れこむが、すぐに起き上がる。

「おい、大丈夫か？」

「リュウケンドー、これを見る」

ジャークムーンが見せたのは水晶に閉じ込められた人々だった。

「なに！？ お前また……ッ！」

「これを割られたらこの中にいる奴等は死ぬ」

はやてとシグナムは水晶をよく見るとネーナが囚われているのも分かった。

『くそ、ここから出せ塵芥！！』

「どこが正々堂々やねん！！」

「剣士の風上にもおけん！！」

はやてとシグナムがジャークムーンに対して怒鳴るが「割るぞ？」と脅され動けなく。

「ジャークムーン、どうして……。正々堂々戦おうって言ったじやねえか！」

「満月の太刀！！」

満月の形をした斬撃をゴッドリュウケンドーに喰らわせるジャークムーン。

「ぐわあああ！！！！？」

さらにジャークムーンの剣での攻撃を防がずに何度も攻撃を受ける  
ゴッドリュウケンドー。

「おわああ!!?」

「反撃すれば水晶を割るぞ」

そう脅され、ゴッドリュウケンドーはまともに戦えなかった。

だがその時……。

「ダブルショット!!」

ジャークムーンの水晶を持っている右手以外を正確に捕え、強力な  
銃撃をジャークムーンは受ける。

「うおっ!?!」

その際水晶を手から放り投げる様に落としてしまうが、落下する前  
に赤い線に銀色の身体の龍の様な戦士「魔弾銃士マグナリュウガン  
オー」が現れ水晶を掴み取る。

「マグナリュウガンオー、ライジン!!」

「マグナリュウガンオー!?!」

マグナリュウガンオーの登場に驚く一同。

「久しぶりだなあ、カズキ!」

「まさか、オッサン!」

「オッサン言うな!」

どうやらカズキの仲間らしい。

「カズキ、あいつはもうお前の知ってるジャークムーンじゃない。  
魔物だ……」

「だけど……」

『その通りだカズキ、奴はもう殆ど魔物の心に支配されている。  
それなら支配される前に、倒すのがジャークムーンにとってもいい  
筈だ。 完全な魔物になることをあいつが望むと思うか?』

ゲキリュウケンのその言葉にゴッドリュウケンドーは何も返せなかった。

「分かった」

そこへ魔導師服になったはやてとシグナムが駆けつける。

「ジャークムーン、行くぜ!」

水晶を安全な場所に置くとゴッドリュウケンドー、マグナリュウガンオー、シグナム、はやては並び立つ。

その時だ、計画が失敗した為鳴滝は灰色のオーロラを出現させ、虫のような鋼の身体を持つ魔物「レプトリックス」を出現させ、ゴッドリュウケンドー達に襲いかからせる。

「おわあ!」

ゴッドリュウケンドー達はレプトリックスの攻撃を避け、マグナリュウガンオーは「俺に任せろ」と言いレプトリックスに向かい走って行く。

銃型の龍の顔がある「ゴウリユウガン」と銃型のもう1つの武器「マダンマグナム」を構えてレプトリリックスに銃弾を撃ちこむ。

「ダブルショット!!」

レプトリリックスはそれを鬱陶しく思い、長い脚を使ってマグナリユウガンオーに攻撃して来るがマグナリユウガンオーはジャンプして避け、レプトリリックスの背中を踏み台に背後に回る。

「マグナゴウリユウガン!!」

『マグナパワー』

ゴウリユウガンの先にマダンマグナムを合体させ、「マグナゴウリユウガン」にし、1つのキーをマグナゴウリユウガンに差し込む。

「ファイナルキー、発動!!」

『ファイナルクラッシュ』

「マグナドラゴンキャノン……発射!!」

マグナゴウリユウガンの銃口から炎が飛び出し、その炎は龍の形となってレプトリリックスを飲み込み、レプトリリックスは爆発して焼き払われた。

『ターゲット、完全消滅』

「ジ・エンド」

ゴッドリユウケンドーはジャークムーンの剣裁きを避け、右からシグナムがレヴァンティンをジャークムーンに向けて振り下ろすがゴッドリユウケンドーの首根っこを掴んでゴッドリユウケンドー盾に

する。

「うわあ!!?」

盾にされたゴッドリュウケンドーは勢いの止まらないシグナムに斬りつけられる。

「すまん、カズキ!」

「2人とも離れて!! ミストルティン!!」

最大7本の光の槍をジャークムーンに放つはやてだが、ジャークムーンは満月の太刀や三日月の太刀で全て弾く。

「あいつ、あんなに魔力使って大丈夫なのかよ!？」

「弱い弱い、この程度か？」

ゴッドリュウケンドーの元にシグナムとはやてが駆け寄る。

「確かに、鳴神が認めるだけはあるか……」

「こうなったら、2人とも、魔力を俺のファイナルキーに注いでくれ!」

「「えっ?」」

ゴッドリュウケンドーに突然そんなこと言われて、戸惑うはやてとシグナム。

「力を1つにするんだよ、頼む!」

「分かった、シグナムもお願いな?」

「はい」

ゴッドリユウケンドーはゲキリユウケンの持つ所を盾に収めるようにはめ込み、1つのキーを取り出し、キーにはやてとシグナムは手をかざして魔力を詠与える。

「何をする気が知らんが……」

ジャークムーンは今の内に攻撃を仕掛けようとしたがマグナリユウガンオーの銃撃で阻まれる。

「貴様」

「よし、充填完了！！ 魔力ファイナルキー、発動！！」

ゲキリユウケンにキーを差し込ませる。

『ファイナルクラッシュ』

「剣士！！ 魔弾龍！！ 夜天の主！！ 烈火の将！！ 4つの力が今1つとなる、四位一体！！ 龍王！！ 魔弾斬り！！！！」

ゴッドゲキリユウケンを振りおろすと剣先の刃から通常は1体だが、はやてとシグナムの魔力を詠与えられたので青い龍が3体飛びだし、通常の3倍の威力を誇る「四位一体・龍王魔弾斬り」をジャークムーンに放ち、ジャークムーンは剣で防ぐが、耐えきれず吹き飛ばされ爆発を起こした。

「ぐわああああ！！！！！！？」

「ジャークムーン、安らかに眠れ……」

ゴッドリユウケンドー、マグナリユウガンオーは変身を解き、はやてとシグナムも元の格好に戻る。



マグナリユガンオーに変身していたのは15歳くらいの少年であり、サングラスをかけていた。

ジャークムーンが消えたことで水晶から人々が放りだされる様に解放される。

「おわあ!？」

ネーナも同じく放りだされる様に飛びだしたが偶然にもマグナリユガンオーに変身していた「不動銃一」<sup>ふどうじゅういち</sup>にお姫様抱っこする形で受け止めた。

「おっと」

「なっ…… / / 離せ塵芥!! / / / /」

顔を真っ赤にしたネーナは銃一の顔面に強烈なパンチを叩きこんだ。

「ぐぼお!!？」

\*

ヤプールの次元の狭間では、ヤプールが寸前の所でジャークムーンを救っており、次元の狭間にジャークムーンは生きていた。

実はあの時、ジャークムーンが「死んだように」見せかけていたのだ。

爆発はヤプールが作り出した幻影である。

「助かったぞ、ヤプール」

「礼には及ばん、だが次は……」

「分かっている、次こそはリュウケンドーを倒す……！」

\*

そんなことは知らないカズキ達はそれぞれ家に戻り、銃一も行く所が無いので八神家に住むことになった。

「そつえばオッサン、どうやってこの世界に？」

ダイキが銃一に尋ねてみると……。

「オッサン言うなダイキ、アンタの方が年上だろ。俺は気付くとこの世界に来ていてな、あちこち旅していたんだ。それでさつき偶然お前達を見つけたという所だ」

一方、カズキはソファに座って少し沈んだ様子。

「カズキ……」

はやてはカズキを心配そうに見ており、カズキもそれに気付きはやてを自分の膝に乗せる。

「ひゃっ／＼／＼」

「大丈夫、僕は平気だから」

笑顔を自分に向けるカズキに、ドキッとしてしまったはやてだった。

（有難う、はやて）

\*

ウルトラマンゼロ

「月の剣士、ジャークムーン。心の殆どを魔物の心に支配されている状態になってしまったが、その腕は確かなものだ。果たしてジャークムーンとカズキが再会する時、どうなるのか……？」

次は原作の設定を変え、マテリアル事件から数カ月後になのはの『あの話』をやります。

ゼロ

「さあて、次回はコレだア！！ 魔法の訓練を無茶してやるのはとフェイト。ある無人世界でロストログアの回収に向かうが……、2人の前に金髪の女性が現れる。次回！！ 『別世界の絆の巨人』！！」

第2弾 『ジャークムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』 (後書き)

次回もタイトル変わるかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3545x/>

---

リリカルなのはHEROS外伝

2011年10月23日20時25分発行